

2010年5月15日
第188号

題字 住谷悦治



燎原社

(京都の民主運動史を語る会)

代表 岩井忠熊

事務局

京都市左京区高野東開町1-23

第三住宅33-302 井手幸喜

〒606-8107

tel&fax075 (722) 3823

会員消息／情報スクランプ／編集後記	12
創刊30周年記念「燎原」と私（下）	岩井忠熊・蓮佛亨・黒川美富子・小田切明徳
「語る会」発足の頃①	井手幸喜
連載「創刊当時の『夕刊京都』のこと（4）と紙面の変遷（上）	一ノ瀬秀文
BOOK『にんげんをかえせ 原爆症裁判傍聴日誌』	川合葉子
「落葉集 戦後の経験のなから」	岸 伸子
「わだつみ像」破壊の頃 立命大Ⅱ部で学んだ行動する生き方	湯浅俊彦
「悼」渡辺元治医師	11 10 9 8 4 3 2

この一枚 60年安保闘争の河原町通りフランスデモ



写真は河原町をデモする自治労の隊列。下は末川総長を先頭に広小路を出発する「立命館大學教授團」

5年前、1960年の新安保条約批准に反対する国会請願署名は1300万筆を超えて、4月5日の第15次全国統一行動からは、連日10万人の国会請願デモが展開された。

この高まりにあせった岸内閣は5月19日に警官隊と暴力団を院内導入し、20日午前零時に社・共両党の全議員を排除して会期延長を採決したあと、新安保条約批准を自民党単独で强行採決した。

このファッショ的暴挙に、国民の怒りは頂点に達した。6月4日の第17次全国統一行動は京都でも最大の盛り上がり。午後からの円山集会は第3会場までつづられ、3万人が公園・知恩院前を埋めつくした。

黒川知事、末川立命館総長も演壇から訴えた。四条通りも河原町通りも道いつぱいに広がった隊列、警察も全く手が出せなかつた。

岩井忠熊（いわい・ただくま） 本会代表。立命館大学名誉教授。京都市右京区在住。

蓮佛亨（れんぶつ・とおる） 建築家。本会会計監査。

黒川美富子（くろかわ・みふこ） 図書出版文理閣社長。

一ノ瀬秀文（いのせ・ひでふみ） 大阪市立大学名誉教授。元「夕刊京都」記者。大阪府交野市在住。

川合葉子（かわい・ようこ） 原子物理研究者。原爆

展掘り起こしの会。京都市北区在住。

岸伸子（きし・のぶこ） 札幌女性史研究会会員。北海道美瑛町在住。

湯浅俊彦（ゆあさ・としひこ） 本会世話人。京都府

【京都の民主運動史を語る会】年会費（会報代とも）3,000円 郵便振替払込口座 01060-7-15762 加入者名 燐原社

燎原と私

(下)

次世代に豊かな引き継ぎごう

本会代表 岩井忠熊

三〇年まえに

発足した時の主要なよびかけ人のほとんどは私も面識がある方たちだったが、年齢差が大きく、私は親しいという関係ではなく、ただ依頼に応じて協力したにすぎなかつた。ほとんどの方が治安維持法による弾圧を受けた人たちであった。全部の方々が亡くなつていき、中心メンバ

ーが世代交代して、ついに私が会の代表をつとめることとなつたが、私も八十代の半ばをこえた。

私は歴史の教育・研究者だったから、この仕事の重要性はよく分かっているつもりだ。なんとかつぎの世代に民主運動のゆたかな歴史を引きついでもらいたい。京都に特化しているが、こうした性格の民主運動史を語り記録する会は全国にも稀少で、運動史専門家の評価も得てきた。時代ははげしく変化し、流動している。

何が変わり、何が変わらず、そしてつぎの時代はどうなるのか。この会が有力な手がかりとなることを目ざして前進しよう。

井手さんが「燎原」3月号に書いている、「荘冠友の会は」は、私が大学4回生のとき、毎日、木村京太郎さんの鳴滝の自宅に通つて、アシスタントをさせてもらつて、懐かしく思いました。

そのとき、

「狭山事件」の、

座談会のテープ

を起こしたり、

校正を手伝つた

り、読者に送る

帶封の住所書きもしていまし

た。

そんなご縁から北原泰作さん

の家に古い直訴時代の資料整理にも

派遣されました。

お家に泊まり込んで、食事つき

化・育成に励みたい。

京都の旭丘中学校のたたかいの基礎条件を築き上げた人物に京工織大・織維学部古賀新蔵助教授の氏名が出てきた。私のある団体への入

会・推薦者の一人である。京都の統一戦線蓄積の一つの事例である。

木村さんのアシスタントをした

ことが、後の出版・編集の基礎技

量になりました。ときおり、木村

さんの獄中体験を聞かされました。

していただけました。

木村さん

のアシ

タント

をした

ことが、後の出版・編集の基礎技

量になりました。ときおり、木村

さんの獄中体験を聞かされました。

していただけました。

木村さん

のアシ

タント

をした
ことが、後の出版・編集の基礎技
量になりました。ときおり、木村
さんの獄中体験を聞かされました。
していただけました。

木村さん

のアシ

タント

をした

ことが、後の出版・編集の基礎技

量になりました。ときおり、木村

さんの獄中体験を聞かされました。

していただけました。

木村さん

のアシ

タント

をした

ことが、後の出版・編集の基礎技

量になりました。ときおり、木村

さんの獄中体験を聞かされました。

していただけました。

木村さん

のアシ

タント

をした

ことが、後の出版・編集の基礎技

量になりました。ときおり、木村

さんの獄中体験を聞かされました。

していただけました。

木村さん

のアシ

タント

をした

ことが、後の出版・編集の基礎技

量になりました。ときおり、木村

さんの獄中体験を聞かされました。

していただけました。

木村さん

のアシ

タント

をした

ことが、後の出版・編集の基礎技

量になりました。ときおり、木村

さんの獄中体験を聞かされました。

していただけました。

木村さん

のアシ

タント

をした

ことが、後の出版・編集の基礎技

量になりました。ときおり、木村

さんの獄中体験を聞かされました。

していただけました。

木村さん

のアシ

タント

をした

ことが、後の出版・編集の基礎技

量になりました。ときおり、木村

さんの獄中体験を聞かされました。

していただけました。

木村さん

のアシ

タント

をした

ことが、後の出版・編集の基礎技

量になりました。ときおり、木村

さんの獄中体験を聞かされました。

していただけました。

木村さん

のアシ

タント

をした

ことが、後の出版・編集の基礎技

量になりました。ときおり、木村

さんの獄中体験を聞かされました。

していただけました。

木村さん

のアシ

タント

をした

ことが、後の出版・編集の基礎技

量になりました。ときおり、木村

さんの獄中体験を聞かされました。

していただけました。

木村さん

のアシ

タント

をした

ことが、後の出版・編集の基礎技

量になりました。ときおり、木村

さんの獄中体験を聞かされました。

していただけました。

木村さん

のアシ

タント

をした

ことが、後の出版・編集の基礎技

量になりました。ときおり、木村

さんの獄中体験を聞かされました。

していただけました。

木村さん

のアシ

タント

をした

ことが、後の出版・編集の基礎技

量になりました。ときおり、木村

さんの獄中体験を聞かされました。

していただけました。

木村さん

のアシ

タント

をした

ことが、後の出版・編集の基礎技

量になりました。ときおり、木村

さんの獄中体験を聞かされました。

していただけました。

木村さん

のアシ

タント

をした

ことが、後の出版・編集の基礎技

量になりました。ときおり、木村

さんの獄中体験を聞かされました。

していただけました。

木村さん

のアシ

タント

をした

ことが、後の出版・編集の基礎技

量になりました。ときおり、木村

さんの獄中体験を聞かされました。

していただけました。

木村さん

のアシ

タント

をした

ことが、後の出版・編集の基礎技

量になりました。ときおり、木村

さんの獄中体験を聞かされました。

していただけました。

木村さん

のアシ

タント

をした

ことが、後の出版・編集の基礎技

量になりました。ときおり、木村

さんの獄中体験を聞かされました。

していただけました。

木村さん

のアシ

タント

をした

ことが、後の出版・編集の基礎技

量になりました。ときおり、木村

さんの獄中体験を聞かされました。

していただけました。

木村さん

のアシ

タント

をした

ことが、後の出版・編集の基礎技

量になりました。ときおり、木村

さんの獄中体験を聞かされました。

していただけました。

木村さん

のアシ

タント

をした

ことが、後の出版・編集の基礎技

量になりました。ときおり、木村

さんの獄中体験を聞かされました。

していただけました。

木村さん

「語る会」発足の頃

井手幸喜（本会世話人）

故稻田達夫さんのこと

稻田達夫さんを最後に会の創立メンバーすべての方が鬼籍に入られた。稻田さんは会世話人として最後までお名前はあつたのだけれど、世話人会・「燎原」編集会議においてになることはなかつた。1997年10月4日の例会、民主府政を支えた立場から「蜷川民主府政28年を語る」の演題でお話しになつたのが、会の公式の場での最後になつたのではないだろうか。

なつたのではないだろうか。

とんどを担つて頂いていた奥村和郎さん、そして私までにも慰労と激励の連絡を度々頂き恐縮したことを記憶している。

稻田さんは会の活動や役割を語る際に必ずといっていいほど「過去を現代に生かし未来を開く」ことが原点と語っていた（年頭にあたって『燎原』に寄せられた文章には必ずこのことが記されている）。また連絡の際は、時代は変化している、原点を忘れず時代にマッチした会誌の編集をよろしくともおっしゃっていたことが思い出される（井上吉郎さんが前号で記されてきたことと意味することは同じなのだけれども）。

「過去を現代に生かし未来を開く」が原点

稻田さんは、会の創立に関わって「故木村京太郎さんと『燎原』」（第73号、88年7月）「燎原100号を迎えて」（95年6月）という二つの文章を会誌に寄せられている。小田切明徳さんの「『語る会』の発足の頃」（第151号、04年3月）にある会の前史の記録（旧友クラブ・土曜会）（京都の革新運動を守る会（仮称））準備会、79年

方自治の確立をめざす」（新春おもいづくままで）第82号、92年1月）新たに取り組みのひとつ、歴史をふりかえる、そのことを手懸りとして京都のこれから運動を切り拓くことを目的とされた参加ではなかつたのだろうか。なお稻田さんによれば、「題字は木村さんを通じて住谷悦治先生にござります」とお聞きいたしました。

(の機関誌となる)が結成され、79年には部落問題研究所の30周年にあわせて「道ひとすじ」も上梓されていた。ただ当時の木村さんは、部落解放運動の正常化を願いつつ、その主たる活躍の場は、「荊冠友の会」の世話役、そして「統一・刷新・有志連」に比重がおかれていたように思われる。

「荊冠友の会」は1965年10月に発足、機関誌『荊冠の友』(66年7月1日創刊、第106号(75年9月)まで)を発行、会の連絡事務所は木村さん宅だった。「友の会の結成によせて」(『荊冠友の会』創刊号)とした阪本清一郎さんの文章には以下のように綴られている。

「…四十余年後の今日、その成果としての同和対策審議会の答申に当たつて、政府はいまその対策によろちいている。そこで残るは考証ば

木村京太郎さんと「荊冠友の会」の発案、編集は井垣次光さん、趣意書と会則は私が担当することと（第73号。なお「100号を迎えて」では「この顔ぶれがいつも裏方の常連であつたとの記述もなされている）なつたと記されている。

「…四十余年後の今日、その成果としての同和対策審議会の答申に当たつて、政府はいまその対策によろちいている。そこで残るは考証ば

会の経歴について和らぎも参加の時
びかけがあり：部落問題研究所の古
い建物の二階、集まつたのは数名」
(第73号)と記されていることからし
て、稻田さんの会への参加は80年の
発足準備会からのではないだろう
か。

100号を迎えての文章には「会

『解放路線』7年には「解放運動の現状を憂い正しい発展を願う全国部

が発足してから15年を数え、そのうえ会員も四百名近くまで発展しよう

「落有志懇談会」の結成、「荊冠友の会」の「水平社宣言の碑」(奈良県)

創刊当時の『夕刊京都』のこと

(4)

一ノ瀬秀文（大阪市立大学名誉教授）



編集体制をめぐる抗争と紙面の変遷

(上)

氣で、當時、社内で何が起つていいのかさっぱり気付かなかつた。誰も、そういう話をしなかつたのである。「光さん」などは、取締役で編集局長能勢克男の次男であるから、事態を最もよく知つていたはずであるが、もともと言葉数が少ない彼と

いうこともあって、まったく何の気配も感じられなかつた。

紙面めぐり対立、編集局封鎖も

しかし、すでにその頃、編集（紙面）のあり方をめぐつて経営陣内部で意見の対立があり、それが編集部門の社員と営業部門の社員との疎外感とも絡み合い、とんでもない事件に発展することになる。それは、

（注）『京都日日』でも同じ日付けの新聞を会社側と労働組合側の両者で発行したことがあります。これは数日間に亘つて続けられた。1949年に入つて統制外の用紙（センカ紙）の入手が可能となり、競争が激化して弱小新聞の淘汰が進む中で、経営困難となつた『京都日日』経営者側が京都新聞に合併話を持ち込み、同年7月正式の覚書がとり交わされた（『夕刊京都』と京都の左翼文化人）⁽³⁾、55頁）。これに反対した労働組合が社屋を占拠し、組合管理のかたちで『京都日日』を自社工場で印刷し、発行した。会社側は京都新聞社の工場を借りて『京都日日』を印刷し、発行した（同、56頁）。

前に述べたような経緯（本連載⁽¹⁾参照）があつて、住谷、能勢、和田に渡辺を加えた4人が編集の主軸となり、1946年5月12日付で『夕刊京都』創刊号が発行された。当 日発刊の新しい新聞を前にして創刊を祝う集いがあのあまり明るくない社内で催された。湯呑茶碗に日本酒を注いで乾杯という極めてつましいものだつた。ホテルというようなところで食事も出て盛大で華やかに開かれたわけではなかつた（伊東和子の話）。能勢をはじめとする関係者たちの慶びと緊張に満ちた胸の裡はいかばかりであつたろうか。ついでながら、『京都日日』の創刊祝賀会も創刊当日の4月1日に同じく自社内で行われている（北原儀子・道彦の妻の話）。和子（旧姓辻、山口（繁）の妻の話）。

私は、同年10月はじめの入社であるため、創刊から約5ヶ月間の、初々しく活気に満ちた編集局の雰囲気とその頃の新聞紙面を実際に目に見ていないし、新聞づくりを体感していない。それどころか、私が入社した途端、ほとんど全く時を同じくして、嵐が吹き始めたのであるが、私はそのことに気付かず、整理部で、原稿に見出しど活字の号数をつけたり、写真の縮尺を測つたりして毎日をノンビリすごし、昼休みになると、「光さん」（能勢光）や柴田スミ子その他4、5人で混声合唱の練習に精を出していた（カメラマンの矢代が指導）。私は全く世間知らずの脳天

他方、閉め出された夕刊京都の編集局員たちは、烏丸通りを隔てた社の向かいの商工会議所で編集作業を行ひ、これまでどおりの『夕刊京都』をいつものように京都新聞で印刷し、発行した。新聞舗は同じ日付の二つの『夕刊京都』を配達し、売店も2種の『夕刊京都』を売るにこなつた。

集局員たちは、烏丸通りを隔てた社の向かいの商工会議所で編集作業を行ひ、これまでどおりの『夕刊京都』をいつものように京都新聞で印刷し、発行した。新聞舗は同じ日付の二つの『夕刊京都』を配達し、売店も2種の『夕刊京都』を売るにこなつた。

（注）『京都日日』でも同じ日付けの新聞を会社側と労働組合側の両者で発行したことがあります。これは数日間に亘つて続けられた。1949年に入つて統制外の用紙（センカ紙）の入手が可能となり、競争が激化して弱小新聞の淘汰が進む中で、経営困難となつた『京都日日』経営者側が京都新聞に合併話を持ち込み、同年7月正式の覚書がとり交わされた（『夕刊京都』と京都の左翼文化人）⁽³⁾、55頁）。これに反対した労働組合が社屋を占拠し、組合管理のかたちで『京都日日』を自社工場で印刷し、発行した。会社側は京都新聞社の工場を借りて『京都日日』を印刷し、発行した（同、56頁）。

『夕刊京都』のばあいは、ロックアウトを行つた山口繁太郎側もロックアウトされた能勢克男側の編集局員も、京都新聞の輪転機を使って、それぞれの『夕刊京都』を印刷、発行したという点で極めて特異だつた。京都新聞の役割はデリケートで複雑であるが、結局は山口に助力したことに間違ひない。

これは、いずれの側にも衝撃を与えることになり、2種の『夕刊京都』同時発行という事件は1日で終わつたものの、これまでとなんの変わりもない編集のありようを今後も続けていいのかという反省も加わつて、これまでの紙面づくりに修正が加えられることになった。しばらくは、この過渡的状況が続いたのち、やがて本格的な編集体制の「改革」が実施される。それは、夕刊京都新聞社の会社体制の根本的編成替えおよび新人事と結びついて強行された。1947年4月、創刊後、まだ1年を経ない時点のことである（改めて後述）。

そして、48年8月までに、住谷も能勢も退任に追い込まれる（後述）。つまり、革新的オピニオン・リーダーの旗を掲げた新聞は、47年4月にすでに変貌を遂げようとしていたのであつた。それでも、なお、まだ、革新的要素の片鱗があつたとすれば、創刊以来在籍した記者と新しい記者たちがその良心に基づいて『夕刊京都』の名を辱めないようと個人的に努力したことによるものであろう。しかし、それも、50年7月のGHQの命令による新聞通信放送分野のレッド・ページによつて、断ち切られることとなる。

革新の旗はこうして下ろされた

『夕刊京都』は1982年まで存



『夕刊京都』発刊間もなく（右から）住谷悦治、経済学者の石浜知行、能勢克男。1946年、京都新聞社屋上で。（『回想の能勢克男』より）

続し、单一の夕刊新聞としては極めて長く続いたことになる。しかし、本稿の主旨は、革新の旗を掲げて創刊された『夕刊京都』がどのような理由と経緯でその旗が下ろされるに至ったか、また、紙面はそのときまでどのように変容を遂げていったかの考察ということにある。それが50年7月までだということに異論はない。

いと考える（レッド・ページに遭つた人たちが、その後どうなつたかについても述べる必要がある。しかし、本稿ではそれに触れる余裕がない）。

田中秀臣『沈黙と抵抗：評伝・住谷悦治』の第九章のなかで著者は、

『夕刊京都』の紙面の変化を指摘し、46年5月の創刊から4カ月までとそのあと（9月以降）とをくらべると

『土曜日』的な雰囲気をもつ文化新聞から、より論説を重視した政論新聞への転換が見られる（202ページ）と述べ、そして、「四七（年）四月以降は、文化新聞の要素や、また政論新聞的な色彩さえもほとんど消失している。つまり今日の大新聞の夕刊紙となんら変わらないものになっていた」（205ページ）と分析しているが、①46年5月の創刊から4カ月の時期、②46年9月から47年4月まで、③47年4月以降の3つの時期区分の変化という指摘は非常に鋭く、夕刊京都の体制変化にほとんどピッタリと対応していると言えるだろう。ただ、田中著は、46年10月以降に起こった山口繁太郎のクーデター事件や47年4月の会社体制の大改革、48年8月の能勢罷免事件（後述）を見ていないため、変化の契機を指摘できなかった。

『夕刊京都』の編集体制の変化と紙面の変化の時期区分について、巧まずして実際に要を得た説明を与えてるのが、編集部の文化部長を務めた森竜吉である。「回想の能勢克男追悼文集」に寄せた稿（「能勢先生の『夕刊京都』」）のなかで、森は、まざ、「創刊当初の『夕刊京都』は、全く新聞好きでは人後に落ちぬが、全く

区分の変化という指摘は非常に鋭く、夕刊京都の体制変化にほんどのピツタリと対応していると言えるだろう。ただ、田中著は、46年10月以降に起こった山口繁太郎のクー・デター事件や47年4月の会社体制の大改革、48年8月の能勢罷免事件（後述）を見ていないため、変化の契機を指摘できなかつた。

淋しい一面が次第に色濃くなつた』『土曜日』的文化新聞を創刊当初と同じスタイルで続けることが困難となつたから——引用者) (同)。これが、第二期に当たる。

そして、これに続けて、山口繁太郎のクー・デター事件について描写し、「まったく内容の異なる同じ紙名の新聞が二つ同日付で発行され

淋しい一面が次第に色濃くなつた』『土曜日』的文化新聞を創刊当初と
同じスタイルで続けることが困難となつたから——引用者）（同）。これ
が、第二期に当たる。

そして、これに統けて、山口繁太郎のクー・データー事件について描寫し、「まったく内容の異なる同じ紙名の新聞が二つ同日付で発行された」が、「この（前代未聞の）事件のあと、夕刊京都からは創刊時の能勢先生の抱負と夢は消え、「土曜日」とはゆかりのない新聞へと変わつていった」（143ページ）と指摘している。森にも、森なりの三つの時期区分の認識があつたということである。クー・データー事件が、第二期を終わらせ、第三期への移行の契機

の素人といつてもよい文化人の梁山泊の観を呈した」（140ページ）と記し、その記述の節のタイトルを「素人の梁山泊」としている。これが第一期に相当する。

となつた、と言つてゐるわけである。

しかし、森が意識的に触れなかつたと思われるが、47年4月の株式会社化と増資、編集部門のドラステイックな改編のことである。

それに言及する前に、山口繁太郎のクー・デター（会社ロックアウト）事件に関連して、京都新聞の関与が強まつたこと触れておく必要があるようと思われる。

山口繁太郎が、編集局をロックアウトして、独自に『夕刊京都』を発行するといつても、自分一人ではできないし、能力もない。プロの編集者が何人か必要であり、前もつて体制を整えておかねばならない。どんな紙面を作るかの構想も要る。印刷のために、まず、活字を組んで、紙面を作らねばならない。輪転機使用の必要とし、京都新聞の工場を使う了承を得たうえ、その体制（時間など）も整えねばならない。このほとんど承を得ねばならない。このほんと山口繁太郎が、京都新聞に助けられて正規ルートでない用紙を入手できたと思われる。

一掃された『土曜日』色

山口繁太郎クー・デター事件は、能勢の「素人の梁山泊」が長く続かぬという警告の一石を投じたが、会社に不法な行動で混乱を持ち込み、損害を齎したかどで、自らの責任をとつて役職を辞任することになつた。そしてそれは、外部勢力による『夕刊京都』の体制改編の空気を助長する促進剤にもなつた。

新規の協力が必要となる。しかも、二つの『夕刊京都』が京都新聞の工場を使用することになる（注1）。京都新聞絡みの出来事で、京都新聞への依存・従属が強まる契機が生じたのである。さらに、もう一つ大事なことがあつた。山口繁太郎は新聞用紙をどこからどうして入手したのかという問

題である。山口は、創刊以来『夕刊京都』用紙割当ての申請その他で上京し、奔走の経験の蓄積がある。だ

が、ある日突然新たに新聞を刷るからといって、簡単にヤミの用紙が手に入るわけではない。そのカギを握つたのではという推測がなされ得る。

これは、今では証拠もなく、否定されればそれまでであるが、前にも述べたように、京都新聞で委託印刷と『新日本新聞』（朝刊、四条新町上る）、『輿論新聞』（朝刊）の三つがあつた。ところが、「新日本」は用紙横流しの常習犯という事実がばれて、48年に閉鎖処分となつてゐる。

他方、京都新聞は委託印刷の形式で、「余分の用紙」を入手できていた（井川光雄、本稿第(1)回で紹介）。山口繁太郎は京都新聞に助けられて正規ルートでない用紙を入手できたと思われる。

新聞社運営の体制が根本的に変わる。とくに、編集部門の改組はドラステイックなもので、「素人の梁山泊」はすっ飛んでしまつた。従来の編集局制度と政経、社会、文化、整理の4部制はなくなり、編集局長、報道部長とデスクが編集の当事者となつた。

さらに、もう一つ。特定の論説委員（社外の文化人、評論家、学者など）に論説を依頼するという制度は廃止され、デスクまたは担当記者が論説や解説を書く体制に変わった

（完）51ページによる）。こうして、『夕刊京都』と京都の左翼文化人（完）51ページによる）。こうして、編集体制の面でも、能勢がつくった『土曜日』スタイルの文化人的要素は全く一掃され、玄人の報道記者を中心としたシステムに変容されてしまつた。

新しい顔触れの記者たちが、営業の社員とともに、入社してきた。ま

た、それが47年4月の会社再編であつて、『夕刊京都』にたいする支配と影響力を強めようとする勢力の動きに拍車がかかつたのである。

まず、『夕刊京都』は当初の匿名組合から株式会社に組織変更され、これまでの出資金18万円が資本金200万円に増資された。古い出資者の比重が稀薄化し、新しい大口株主に権限の比重が移る。恐らく、京都新聞と山口光太郎（山口新聞舗）のウェートは大きくなりたものと思われる。

新聞社運営の顔触れと比重が変わり、経営陣の顔触れと比重が変わることで、『夕刊京都』は能勢と入れ替わって、新しい編集局長となるのは、47年7月に室町通の新しい社屋の編集室に安岡がやつてきてからだとと思う。安岡と小笠原は京都日日からの移籍者で、京日の記者の多くはもともと読売出身だった。編集局長の席が能勢から安岡に移つたことは、「土曜日」的カラーラーが『夕刊京都』から消え去るということを誰の目にもはつきりと、いうことを誰の目にもはつきりと、また、象徴的に示すものだつた。浅田、神楽、原という社会部記者は京都新聞のルートで「送り込まれた」と考えていい。

なお、このあと、創刊に重要な役割を演じた住谷悦治が、戦時下松山高商教授在職中に書いた論文がG.H.Qの公職追放命令に該当するとして、47年10月、夕刊京都社長を辞職する

ず、整理部へ安岡哲三、小笠原澄江。続いて、玉井亮之助（編集局次長）、社会部へ浅田一郎、神楽子治、原在修、編集事務に石割正義、高橋栄子、本田篤子、そして少年社員も数名増員、営業部は一挙に増えた。

このような会社の組織変更や人事について会社側の説明や告示も一切なかつた。新入社員の顔合わせ、紹介も何もなく、ある日突然玉井が編集部の奥のデスクに挨拶もなく座つているので「彼は何者?」と強い不信感が漲るというような状況があつた。

ことになった。住谷は同志社大学での研究教育活動に専念できることになり、1963年から75年までの長期に亘って総長の仕事を果たした。

臨時株主総会で能勢解任決議

47年4月の株式会社化とそれとともに、この取締役会の動きは全く突然もなう社内機構の改編と人事が上述のようなかたちで進められたが、その延長線で同年9月末、取締役の一人であった山口光太郎が社長に就任することになった。これはおそらく、翌10月にGHQの追放令で辞職が予定されていた住谷悦治に代わって山口が『夕刊京都』を代表するという役員人事であつたが、これは取締役会の承認を経ているはずであった。しかし、山口の社長就任についての社内の評判はあまり芳しくなかった。山口には近代的労使関係の理解はほとんどなかつたから、沼田が委員長である夕刊京都労組との団体交渉でしばしば紛糾が生じた。また、山口自身には編集についての深い認識もなく、戦後日本の政治、社会のありように関する思想的認識も十分ではなかつたから、『夕刊京都』のシンボルとしての社長としてはふさわしくないという空気が強まっていた。

このような状況、とくに組合側の対応を反映したものと思われるが、1948年7月31日の取締役会は能勢克男を編集局長兼任の社長に選任することをきめた。しかし、前年の47

年4月以来の『夕刊京都』の実質的支配と主導権を握った勢力からすると、この取締役会の動きは全く突然のことであつたようだ。一ヶ月後の8月下旬に、臨時株主総会が召集され、そこで能勢の解任決議が承認されている。これは47年4月の株式会社化と増資によって『夕刊京都』を真に支配する者は誰かが大きく変わったことを劇的なかたちで示したものだった。

革新的世論紙『夕刊京都』にたいする最後のとどめが、50年7月のレッド・ページによって刺された。これについては次回以降で触れる。

(注1) (1)二つの『夕刊京都』が発行されたのが何年何月何日だったかについて現在の時点ではいまだに確認できていない。私の印象では、私が入社して間もなくだつたようにも思われるが、現在、存命の当時の社員にその確かな記憶がない。また、「二つの新聞」の現物もコピーも発見できていない。(2)山口繁太郎の「クーデター」のプランの中に「二つの新聞の同時発行」というふうに明確な想定があったのかどうかは不確かである。ロックアウトによつて、もう一つの新聞の発行が不可能になると想い込んでいたフシもないわけではない。能勢、住谷の交渉によつて、商工会議所での編集と京都新聞での版組み、輪転機の使用が両者側で可能となつた。(注2)

(注2) 私が入社(但し、まだ試用期間中)して殆ど日を措かず、新聞通信放送労組(新聞單一)の中央から第

二次読売スト支援を意味する「新聞單一としてのゼネスト」指令を下ろしてきた。このストへの同調、支持の空気を作り出すことができないまま、中央でスト中止の結末となつたが、支部によつては多少の紛糾が生じた。夕刊京都支部は、すでに紹介したように、沼田委員長、乙川副組合長、西村書記長が組合運営の柱となり、献身的努力がなされてきたが、

營業部の組合員たちにとっては編集部主導と映つたかもしれない。夕刊京都では新聞單一としての組合運営に公然たる対立の動きがあつたわけではないが、山口繁太郎のクーデターに同調・協力するような流れが生じていたことも確かである。

(以下次号)

(3面より続き)

ミニ湯浅貞夫資料展

5月22日の総会会場で

来る5月22日、30周年記念総会の場で、これまですすめられてきた「湯浅貞夫資料」の展示をしようという話が持ち上がり、準備が始まっています。

96年5月に亡くなられた湯浅貞夫さんは、「燎原」の発刊当初から「会の実務の推進的役割を」(故奥田氏・記)、89年から奥田修三氏とともに「燎原」の編集責任者としてたゞさわり、その間、有名な「目で見る京都の民主運動史」(91年にかもがわ出版から発行)の連載をはじめ、京都の民主運動史の関係、口丹波以北の一揆、農民運動などの連載も手がけられ、それらにかかわる得がたい原資料を含め、数多くの資料、また先駆者の個人ごとのファイルも20冊を超える量になっています。

30周年記念総会では、会場の関係もあり、ごく一部しか展示できませんが、「目で見る京都の民主運動史」で使われた原資料を中心に「ミニ湯浅貞夫資料展」として展示する予定です。乞うご期待。

(藤)

「荊冠友の会」の10年の活動を振り返つて、木村さんは「水平運動の歴史」の顕彰と「水平社宣言碑」の建設の事業は歴史に残るものと振り返つている(『荊冠友の会』第106号)が、毎月の会誌の発行等、世話人としての役回りは大変だつたに相違ない(京都からは木村さんの他に、朝田善之助、水野勝太郎が世話人となつた)。

(以下次号)

裁判官を動かした命の証言

『にんげんをかえせ 原爆症裁判傍聴口証』

長谷川千秋著

BOOK

—「被爆者にとつてはもう今度が最後の機会になるかも知れんと、小杉（功）さんがいってはつた」。そういううわさと一緒に、私たちのところでは原爆症認定集団訴訟を応援する署名の取り組みが始まりました。小杉さんは京都原水協事務局長です。

「原爆症認定」ってない？ 実は現行の法律では、被爆者手帳を持つているだけでは原爆のせいで障害があつたり病気になつたりしても医療給付は受けられないのです。そんなこと知つていましたか？ 被爆者は前もつて原爆症であることを厚生労働大臣に認定してもらうことが必要



四六判276頁、定価1785円（税込）

そこで被爆者の全国組織、日本原水爆被害者団体協議会が、一斉に大勢で申請を出し、却下された人たちが集団で訴訟を起こそうと呼びかけたのです。2003年4月以来提訴が各地裁で始まり、5月27日から近畿の集団訴訟が大阪地裁

度が最後の機会にならなかつても知れんと、小杉（功）さんがいうてはつた。そういううわさと一緒に、私たちのところでは原爆症認定集団訴訟を応援する署名の取り組みが始まりました。小杉さんは京都原水協事務局長です。

「原爆症認定」ってなに？ 実は現行の法律では、被爆者手帳を持つているだけでは原爆のせいで障害があつたり病気になつたりしても医療給付は受けられないのです。そんなこと知つていましたか？ 被爆者は前もつて原爆症であることを厚生労働大臣に認定してもらうことが必要

爆者の1%にも満たない人が原爆症と認定されているだけです。そこで認定の却下を取り消してもらうための裁判を起こさなければなりません。そんなことを一人ひとりの被爆者が準備するのは大変なことです。そういうことを見透かした国が被爆者対策だったかと私などは疑つてします。京都ではその一人の裁判を起こして、14年をかけて認定を取つた人がいました、小西建男さんでした。ところが、勝訴しても国の認定基準は変りませんでした。小西さんはその2年4カ月後に亡くなられました。

そこで被爆者の全国組織、日本原水爆被害者団体協議会が、一齊に大勢で申

裁判の主人公は被爆者

回ごとの審理に必ず数人の原告の陳述が行われました。「被爆するとはどういうことだったのか」、「被爆者はこの60年余りをどのように生きていたのか」ということを裁判にかかわる人々の共通認識にしなければなりません。被爆者の方々は思い出すのも避けていた日々のことを話し、声の出ない人は筆談で証言をし、自分のケロイドを見せることもためらいませんでした。そのすべてで「にんげんをかえせ」と叫んでいるようでした。弁護士さんたちはこういふ原告の訴えが際立つようにさまざま工夫をしておられました。こうして、被爆者が命を削って積み重ねてきた判決は、国の被爆者行政を変えたいという思いがこもったものだつたので、裁判官たちを動かしました。けれども国はまだその基本姿勢を変えようとしてはいないようです。

第2に、裁判の争点は内部被曝の問題でした。被告、国の代理人や証人は初期放射能の影響だけしか認めず、多くの被爆者の認定申請を却下してきたのです。けれども、多くの人が原爆投下後の市内に入り、家族を探したり、後片付けをした後で原爆症の急性症状を起こしていました。遠隔地でも放射能の被害を受けた人がたくさんいました。その人たちの症状が原爆の放射能に原因があることを証明する、そのためには被団協は3人の証人を準備しました。肥田舜

太郎さん（医師）、安斎育郎さん（物理学者）、沢田昭二さん（物理学者）です。肥田さんと沢田さんは被爆者です。この3人の証言で、臨床的にも、理論的にも多くの人の症状が原爆の放射能に起因することを裁判官たちが納得したのです。

この証明は国際的にも大きく評価されるもので、劣化ウランによる被害や、核兵器製作工場、原子力発電所の近くで起こっている病気の解明にも役立つことになるものが含まれています。本当はもっとたくさんの科学者がこういう分野の研究をしてほしいのです。

第3には、この裁判をめぐる多くの人の運動は、国際的にも国内でもとても広範な平和を求める運動と連動していたということです。そういう絡み合いの中で判決が積み重ねられ、核廃絶を願う大きな運動の中の重要な一部分となってきたのです。

元新聞記者、医師の役割

裁判が始まるころ、小泉内閣の下で自衛隊のイラク派遣の基本計画が閣議決定され、日本はアメリカに追随して戦争に引きずり込まれていくのではないかという不安が立ち込めしていました。そのアメリカで、オバマ大統領が誕生し、プラハで「核兵器のない世界を」と演説したのです。日本では自公政権が倒れ、民主党を中心とした政府が成立し、少しだけ

民意を気にするようになりましたが、フランクして非核三原則も守りきれないような政府です。ただ多く的人が実感したことは、運動することで少しずつ世の中を変えることができるということです。

こういう変動する時代のドキュメントを記録するのに、新聞社を定年退職しても、ジャーナリストであることを辞めないでいる長谷川千秋さんよりほかにふさわしい人はいないでしょう。長谷川さんの文章は被爆者にはとても優しいのですが、国の被爆者行政に対する怒りはすさまじいものがあります。あの温厚な人柄の中のどこにその怒りがためられていたのだろうと思うほどです。

最後に、目立たないけれど被爆者の日常を支えている地域の医療機関や近所の人々がいること、被爆者本人が亡くなつても、その遺志をついで裁判を続ける家族たちがいることを忘れることはできません。近畿の集団訴訟でも、兵庫の郷地秀夫医師、大阪の小林栄一医師、京都の三宅成恒医師の3人の民医連の医師の代表として郷地医師が証言を行っています。民主運動の記録の中には死を越えて』の翻訳に携わった事情が巻頭の『私とローリングバーグ事件』、立命館大学の退官記念講義である文

学の中の人間解放の叫びを読み解くアメリカ黒人文学の研究者として、また、貫して民主主義のための運

川合葉子（本会世話人）

落葉集

伊藤堅二著

元京都私教連委員長、日教組私

学部副部長で、立命館大学
名誉教授・伊藤堅二さん（本

会会員）の著書。戦後旺文社
で労組結成に参加し、のち立

命館大学、成安造形大学教員、
また亀岡の「市民本位の明る

い民主市政をつくる会」代表
委員をつとめた時期、時期に

雑誌などに執筆した文章と、
退官記念講義、近年の海外旅

行記で、「自分史」にかわる
ものとして構成されている。

1953年アメリカで、ロ

イゼンバーグ夫妻が「ソ連の
スパイ」として処刑された。

世界中で抗議の声があがつ

た。この時に夫妻の遺稿『愛

は死を越えて』の翻訳に携わ

った事情が巻頭の『私とローリ

ングバーグ事件』、立命館大

学の退官記念講義である文

学の中の人間解放の叫びを読み解く

アメリカ黒人文学の研究者として、また、貫して民主主義のための運



（落葉集）

動とともに歩んできた著者の出
発点であった。

第一章「落葉集」は、戦後民
主運動の中での著者の歩みを振
り返る。国庫補助の運動と私学

教育、『ちびくろサンボ』の絶版
問題と出版社の姿勢など、時々
の議論をつうじて、改めて戦後

民主主義の成果と課題が浮かび
上がる。第二章は、アメリカ黒
人文学を中心として論じた「文

学と人権」、第三章はヨーロッパ
旅行記のほか、ポール・ロブズ
ンの足跡を訪ねるニューヨーク

の旅など。

『落葉集』のタイトルには、
著者の経験が「地に落ちた木の
葉が新しく生まれる草木の肥料
となるように」何かの糧になれ
ば、との思いがこめられている。

元京都私教連委員長、半生の証言

版）A5判272頁。1575円。
（落葉集）

「わだつみ像」 破壊の頃

立命大Ⅱ部で学んだ行動する生き方

岸 方
伸子

せんか?」と声をかけたそうで、ホツとされたというのです。

後藤先生ニニもこすで

「中国人強制連行 大江山訴訟の10年」発行

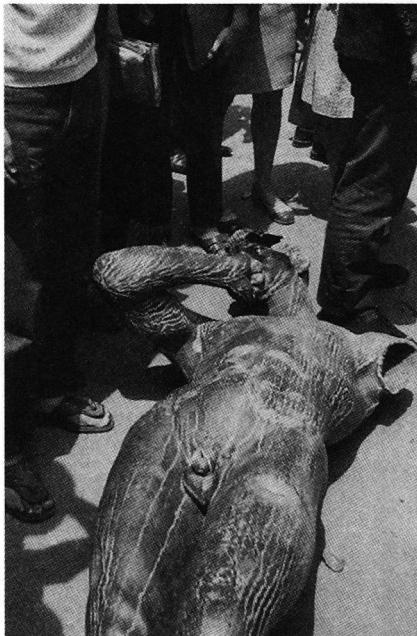
【燎原】第185号（2009年11月発行）の巻頭に岩井忠熊先生が「わだつみ像」をめぐるさまざまなお思い出」を記されました。

「わだつみ像」の立命での建立と、「大学紛争」の中の1969年5月20日全共闘学生による破壊、そして、再建をめぐる彫刻家本郷新の想いや、学生たちを扇動した教官らの行動を書き記している。

私は丁度、1969年春、からくも立命Ⅱ部文学部に入学。「わだつみ像」破壊事件を目の当たりにしました。アルバイト先の洛北生協から駆けつけたのです。狭い広小路の校庭にわだつみ像を倒してロープで引き回す全共闘学生たちと、武装警官の黒い集団が勢いをつけて旋回。わだつみ像の頭部を陥没させ、赤ペンキの「死」の文字も恐ろしかった。

当時の岩井先生のお気持ちを『燎原』紙上に拝読し、Ⅱ部学生として
のみならず沖縄、北海道、九州、山口、新潟などからやってきたⅡ部学生の一人として、授業を継続してお

ぬ回想をお聞きせいだいたことがあります。それは研心館一階の生協への通路で先生とすれ違った時に、私が「お疲れではあります



全共闘によって倒された「わだつみ像」 (1969年5月20日)

戦後の日本を代表する知識人・加藤周一さんの遺言ともいえるドキュメンタリー映画「しかしそれだけではない。加藤周一『幽霊と語る』」が5月21日まで京都シネマ（烏丸四条南）で公開中。死の直前まで、カメラに向かっての語りは正にラストメッセージ、彼自身の歩みとともに構成された作品は感動的だ。意見を交えない幽霊の意見を借りて、現在を批判している。

「加藤周一 幽靈と語る」
21日まで京都シネマで上映

中国人戦争被害者の要求を支える会京都支部（福林徹代表）は、元労働者から聞き取った被害の実態や訴訟の経過を冊子にして1冊千円で市販している。問い合わせ＝福林さん

第2次大戦中、京都府与謝野町の大江山ニッケル鉱山に強制連行され働かされた元中国人労働者らによる国家賠償訴訟の10年の歩みがこのほど冊子にまとめられた。訴訟は98年、元労働者6人が政府と企業に謝罪と損害賠償を求め地裁に提訴。地裁は国と企業の共同不法行為を認定したもの、20年の除斥期間をすぎていたとして請求を棄却、高裁でも敗訴した。

燎原

第188号 (2010年5月15日)

10

渡辺元治医師

「赤旗の歌」に送られて

湯浅俊彦（本会世話人）



西陣の肛門科医、渡辺元治先生が
3月8日亡くなつた。82歳。

京都原水協の筆頭代表理事として、
今年も焼津の3・1ビキニデー集会
に参加、6日には長谷川千秋著『に
んげんをかえせ 原爆症裁判傍聴日
誌』（かもがわ出版）の出版を祝う会
に元気な姿を見せておられただけに
急逝である。

66歳の時、脳梗塞に倒れた。しか
し、杖なしで歩けるようになり、原
水禁世界大会にも毎夏参加してきた。
病院は長男の賢治医師を呼び寄せ、
任せた。渡辺肛門科3代目である。
5年前、動脈瘤が見つかり主治医か
ら手術を勧められていたが応じず、
今回、夕食をす
ませての帰り道、家を目の前にし
たところで倒れ、あつけなく旅立
つた。急性大動脈解離だった。

2年前、傘寿をお祝いしたと

悼

京都解放運動戦士合祀追悼祭は5
月9日午前10時から知恩院の碑前で
行われます。今回合祀される61人の
中には次の方々も含まれています。

「おシリ先生ありがとう 患者ら、感謝のミニュージカル」の見出しで大き
く報じた。ある日の診察室風景をミニ
ュージカル仕立てで元患者らが演じ
たのだ。翌日から患者が急増、元治
先生は悲鳴をあげた。この本は版を
重ね、途中から賢治医師の執筆分も
加えられた。

誰からも愛された。「温かく格調高
い毒舌家のおシリ先生」とは患者の
評。『現代の赤ひげ』と報じた新聞も
あった。しかし、「したい放題で生き
る」には妻・和代さんへの限りない
信頼と甘えがあった。「いつもそばに
和代がいてくれる」安心感、「あなた
に会えて本当に良かった。嬉しくて、
嬉しくて……」のCMソングに自ら
の気持ちを託していた。しかし今回
ばかりは……。

心優しいロマンチストであった。
叔父の嬉野満洲雄氏（元読売新聞
ベルリン特派員）から強い影響を受
け、1946年8月に彼が上梓した
『勝利を惧れる——柏林・東京敗戦記』
（共立書房刊）を復刻出版までして配
つた。嬉野さんは戦後、読売争議の
あと退社し、京都で「時論」という
月刊総合雑誌の編集長を務めていた
ことがある。元治さんからもつと詳
しいことを聞いておきたかった。

京都解放運動戦士の碑に61人を合祀

京都解放運動戦士合祀追悼祭は5
月9日午前10時から知恩院の碑前で
行われます。今回合祀される61人の
中には次の方々も含まれています。

芦田善之（国労大阪地本客車協）

東武司（カシフジ労組委員長）

安藤宣夫（府中小企業中央会理事）

大槻亨（福知山で農業委員）

大槻源太郎（京都市教組）

川北克己（上林「米よこせ闘争」）

鎌田健（福知山市農村労組）

三双惣四郎（南民商副会長）

田中修一（同志社高教組委員長）

谷田悟郎（医師、猪熊診療所所長）

塚本景之（全解連中央委員）

長友孝二郎（京教祖青年部長）

中野金平（北桑田地労協議長）

中別府三郎（立命教職組青年部長）

南部治雄（日本平和委員会理事）

橋本武（丹後民商會長、網野町議）

松本昭（京都中小企業家同友会）

三宅誠孝（京都市議5期）

宮下路男（全農協労連中央執行委）

森勇雄（愛生会山科病院労組）

山本勲（八幡市議5期、副議長）

山本安政（織研新聞労組中執）

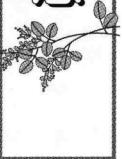
入江実夫（共産党東地区委員長）

末松弘子（新婦人京都府本部会長）

おことわり 連載「うたごえ」よ
高らかに！」は本号休載します。

会員消息

(事務局へ届いた葉書から)



のですが、いざとなると思うにまかせ、フラストレーションをおこしますので困ります。(亀岡市・伊藤堅二)

皆様のご健勝と会のご発展をお祈りします。

「会」の発展がより大切な時期だと思います。皆さんがんばってください。

介護ということです。動きとれず、

総会には欠席させていただきます。

（左京区・山下茂）

いつもお送りしていただきてあります。どうぞ。

教えられること

が沢山あります。旧知の方のお名前

を見ると懐かしい思いになります。

亡くなられる方のふえてくるのは淋しいですが……。(伏見区・細川汀)

30周年記念号の表紙に1950年

メーデーで、高山京都市長、嵯峨府

知事、大山郁夫氏がスクランムを組んで行進されている写真を拝見し、す

ばらしい写真がきれいに保存されて

いるのだと感心いたしました。その

当時は、私はまだ17歳で民主統一戦

線の意味も判つてしまひませんでした

が、成人し、京青連で故・西山秀尚

さん方の指導で、私も皆さんと共に

行動出来るようになつた事、嬉しく

なつかしく思い出しております。

5月22日の総会、皆様のお話を聞

かせて頂きたいのですが、治療のた

め長時間外出出来ませんので残念で

すが欠席させて頂きます。(南丹市・

湯浅幸子)

情報



スクランプ

京都国領会が5周年、総会と冊子発行

国領五一郎を顕彰する京都の会

(梅田勝会長)は3月14日、京都アス

ニーで結成5周年記念第6回総会を開き、国領生誕110年にあたる2

012年には記念集会とレセプションを計画するなどの方針を決めました。

また同会結成5周年を記念して

「国領五一郎から学ぶ」と題する冊子

を刊行、16号まで続いている「会報」

に掲載された講演記録や寄稿を収録しています。A4判37頁。

編

集

後

記



▼前号(30周年記念号)は好評で、

とくに別冊付録にした1号～150

号の全執筆者索引は喜ばれています。

51号～150号の電子ブックを

注文される方も増えています。

「それにもすごいメンバーが執筆さ

れていましたね」と感想をいただきま

した。貴重な資料です。

▼元京都府職員労働組合委員長の川上博司さん(府職員退職者会会長)

から「嵯峨虎三知事の思い出」そ

の人柄・思想と府民・府職員の力

という原稿をいただきました。多く

の秘話を持っています。紙面の都合

で次号から連載します。(湯浅俊彦)